

## ミスター神戸が語る

### 「日本女子サッカーと神戸のスポーツの展望」

元サッカー日本代表・ヴィッセル神戸FW

(株)デイリースポーツ・(株)サンテレビジョン元社長

～日本サッカー協会 永島昭浩 × 神戸市スポーツ協会 沼田伸彦 特別対談

## アンドレス・イニエスタと神戸との関係

### 沼田

先日の7月1日、イニエスタの神戸退団の試合がありました。私も仕事柄いろんな競技いろんな人の引退試合やセレモニーを見てきたんですが、これまで経験した中でも最高の素晴らしいセレモニーでした。

何がそうさせたのか。イニエスタの人柄とか言う人もいますが、あの雰囲気はサッカーの何なんでしょう。

サッカーの文化、サッカーを見る人の文化って独特だなと思う経験を最近いくつか重ねました。野球だとこんな盛り上がり方はしなかったのかなと。

ずっとスポーツに携わってきた人間として、これまであまりサッカーに触れることのなかった自分として、すごい感動、興味が沸いた瞬間でした。



### 永島

まず一点目は世界的な選手が日本に来たということですね。二点目は彼がやはり日本をそして神戸を愛してリスペクトした。三点目は現役選手としてはもう日本でプレーはしないんだけど、引退してから、今後も神戸との関係を続けていきたいという、未来予想図を描いてるようなんですね。本人のそんな気持ちも汲んで、ひょっとしたら将来のサッカー日本代表の監督としての候補にも挙がるっていう、そこまでを選択肢に入れた中での日本サッカー界全体での送り出しだったのかもしれない。

### 沼田

なるほど、そういうことですね。

彼自身、日本語が喋れるわけでもないし、日本のファンの人にそこまで直接何かを訴え

かけるような機会もなかったにもかかわらず、あの時、見ている人間が涙を流し、いろんな感情を入り混じらせた、そんな時間と空間でした。

イニエスタについては、神戸市スポーツ協会とも縁があって、サッカースクール「イニエスタアカデミー」も神戸で展開しているのので、今後も関係性を築いていけたらと考えています。



## 女子サッカー振興の起爆剤

沼田

先日のイニエスタの試合は満員で2万人を超えましたが、同じノエビアスタジアムでINAC神戸の試合だとだいたい2000人で、WEリーグで全体的に観客動員数が伸び悩んでいます。

永島さんには以前にも少し伺ったことがあるんですが、前回の女子のワールドカップ優勝で火がついたけれどその後の現状とか、女子サッカーの行く末とかをどう見られますか。

永島

そうですね。

普及・育成・強化というところで分けていくと、一番は育成のところですよ。日本の問題は、中学校に女子のサッカークラブがないところですよ。小学校でやってもう一段階上がりたいというところで受け皿がない。そこが一番大きな問題でそれをまず解決しなきゃいけない。

と同時に、強化というところでいうと、やはりWEリーグ、なでしこリーグの指導者について、元々Jリーグで監督をやったような方も含めて、S級ライセンスを持っている方が女子サッカーの世界でも活躍する。それがものすごく重要なことの一つじゃないかなと思っています。

そこで力をつけたところで、普及も含めてメディア戦略というところを一気に仕掛けていく、順序としてはそうなるかと。



育成の部分、中学生全体についてシステムを作るのも含めて、時間と経費もかかると思

いますが、そこをやはりしっかりと数字を出して予算をとってやっていかないといけない。そうしないと、ある年はすごい豊富な選手がいてもその時だけだし、継続性がない。滑らかでもいいから右肩上がりの曲線を作るっていう、計画と実行が必要で、普及、育成、強化そしてメディア戦略という部分を構築して、進めていくことがいまでも必要だと思うんですね。

沼田

ちょっと長いスパンの話になりますよね。1年2年なんて話じゃないですよ。

永島

はい。小学生でしっかりサッカーをプレーして全国大会に行った子でも、中学校で辞めてしまう子がいる状態がもう何年も続いています。いま中学校に女子のサッカー部が少なく、部活動の地域移行の問題もあり、新たな受け皿が中学校で作りづらい状況です。そういった状況の中で早急に解決していくためにどうしていくかということ、WEリーグ、



なでしこリーグのチームがさらにきめ細やかに中学生年代を抱える。そこからアカデミーを経てWEリーグへ進んでいく場合もあれば、女子サッカーを続けられる高校へ進学するなど、その流れを作るのが一番重要な近道かなとは個人的には思いますね。

沼田

なるほど。現在空白となっている年代の環境整備ですね。

## 中学生年代がポイント

永島

そこでもっと大事なものは、人によって成長の度合いが違うというところをしっかりと見てあげて、選手の将来に繋げるようにする。だから選ぶ人の目利きと同時に、指導者の質がとても問われますね。

でこぼこがなく、しっかりとした曲線を作っていくために、そこをまずやらなきゃいけないんじゃないかなとは思ってます。

沼田

中学生世代。まさにそこがポイントですね。

永島

もちろん、経営的にも日本サッカー協会の方が予算をつけるべきですよ。そこで人とお金を投資しながら、しっかりと人としてもプレーヤーとしても成長を促すような関係を作ってあげるのが大事だと思います。

WE リーグのチーム経営状況はまちまちだと思いますけれども、おそらく財政の基盤がそこまでの力のないところもあるので、育成の部分は協会の重要な仕事になってくると思います。

沼田

おそらく WE リーグで儲かってしょうがないところは一つもないんじゃないかと。



永島

もちろんです。だからこそ、それぞれの成長の度合いに応じた受け皿の仕組みを作っていくことがやっぱり大事です。AI が発達した時代になればなるほど人が関わることもものすごく重要じゃないかと思います。インパクトもあるし、その関わった人たちにとっても幸せなことだと思いますし、社会的に意義があると思っています。

沼田

今の時代に男女の違いを言うのは憚られるところもあるのですが、女性のアスリートについては、中学生、高校生、20歳代、そしてトップレベルとなっていくという流れの中に個人差もあるし、どうしても波もあります。アスリートとしての寿命、ピークの期間も男性に比べて長くはない。それだけにそれぞれの年代に応じ、個人差もカバーできるようなシステム作りということですか。

永島

おっしゃるとおりです。

将来のなでしこジャパンを目指した子供たちが、将来アスリートとしての人生を終えたとしても、それ以降もサッカーに関わるとか指導者になるとか、必ず未来に繋がっていきますね。そして、その育った子供たちが女子の指導者となり世界一に輝く。それが一番理想の形です。

## なでしこジャパン ワールドカップの展望

沼田

いよいよ女子ワールドカップが開幕です。日本代表なでしこジャパンへの期待のほどを聞かせてください。

永島

もちろん期待しています。確実にチームのレベルは上がっています。グループリーグは突破すると信じていますし、短期決戦なので、波にのったもん勝ちです。



やっぱり日本の強みは一つになって団結できる部分だと思うので、そういう意味では、短期決戦には向いています。いかに波に乗るかですね。

まずは初戦が大事ですが、謙虚に相手をリスペクトしながら戦うのが重要です。身体能力の部分においても局面で1対1の場面で負けてしまうと、大観衆の中でパニックになってしまう。そうなるともう試合中は取返しがつかないの

で、いかにそういうことも想定しながら、ミスをしてもしたミスじゃないと思えるぐらいに腹を据えて、一つになるという日本の強みを常に90分間続けてもらいたいと思います。

沼田

それにしても日本の試合がNHKで放送されることになったのはすごく良かったです。これでおっしゃるように波に乗って、勝ち上がってもらえば一つのきっかけになりますね。再びね。

永島

選手たちの日本の女子のサッカーのためにという発言を聞くと、心強いというか、ありがたいですね。だから僕も何かできるかっていうことで、全力で応援したいと思います。

この前の壮行会で選手の皆さんの話を聞いても、みんなしっかりしていて、たくましいなと思います。

いよいよワールドカップは22日になでしこジャパン初戦で、26日がコスタリカ戦、



31 日がスペイン戦。8 月に入ると決勝トーナメント（ノックアウトステージ）です。

沼田

神戸からも多くの選手が出場します。是非期待しています。

## 神戸の次のストーリー

沼田

私は岡山県で生まれ育ちましたが、神戸市民になってから 30 年経ちます。それなりに神戸への想いはあるわけですが、永島さんは神戸で生まれて育ち、今は外から神戸を見るような立場だと思うんですが、神戸とスポーツあるいは神戸のスポーツみたいなことと言うと、どう思われているのか是非お聞きしてみたいんですが。

永島

そうですね。

現役中は、もう自分のチームと自分自身のことに精一杯で、ヴィッセル神戸に戻るまでは神戸のことをあまり考える余裕はありませんでした。その後ヴィッセルに戻ったのは、震災があってオリックス、神戸製鋼などみんな一つになって頑張ろうっていう時。今までお付き合いのなかった競技のイチロー選手とか、ラグビーの平尾さんとか大八木さんとか林さんとかいろんな人とプライベートでも交流ができるようになった。震災がきっかけではあったんですけど、人と人、人と街がつながっていく、それが神戸という街になっていった。



そして、やっぱりスポーツっていうのは、結果を出さないといけない。

勝ち負けの中で、技術力を向上しなきゃいけないっていうのもあるし、それを後押しするのはファン・サポーターの皆さんです。そういう意味では、本当に神戸というところは、いろんなスポーツがあって応援する環境が整っているというふうに思ってるんですね。

ですから、単発的なことよりも人としてのクローズアップ、選手としてのクローズアップ、チームとしてのクローズアップ、そして神戸市民をクローズアップして、そこをストーリーだてて発信していくこと。未来予想図のイメージを作りながら、戦略的に組みればポテンシャルはどこの都市にも負けないんじゃないかなと思ってんですけどね。

## 神戸市民は贅沢

### 沼田

はじめは外から見ていて、今も感じているのは、神戸は住んでいる人が結構贅沢なんですよ、スポーツに関してですよ、要は何でもあるじゃないですか。

なかなかこんな街はなくて、どんなスポーツでも、トップランクのプロチームがあって、それを楽しむ環境が整っていて。

何でもよりどりみどり、まあ神戸市外ですけど甲子園もありますしね（笑）、そんな中で生まれて育つてということと言うと気がつきにくいことかもしれませんが、スポーツに関しては贅沢な環境にあると思います。

もう25年以上前ですが、アルビレックス新潟というJリーグのチームができて、それまでプロスポーツにあまり縁のなかった地域はものすごく盛り上がり、4万人を超える収容能力のあるスタジアムが毎試合満員になりました。エリアの人口を考えると大変なことだったと思います。それまでトップスポーツに触れる機会に飢えていた地域のエネルギーが爆発した例だと思えます。



そういう意味で言うと、神戸にはいつでもどこでもトップスポーツを体験できる環境がある。そんな中で神戸製鋼が1回すごいピークをつくった、オリックスが日本一になったという爆発の機会はあったんですけども、現状を考えると、どこかその核になるようなスポーツがあるのか、ヴィッセル神戸にかかる期待は大きいですよ。



それにさっき永島さんがおっしゃったように、神戸のプロスポーツが男子サッカーがあります、女子サッカーあります、バスケットボールが今度来ますという単発の視点からだけではなくて、“神戸のスポーツ”というイメージの横串を刺すようなことができなかなと思っています。

現時点で答えはないんですけど、もったいないなあ、と住みながらずっと思っているんです。

## “神戸のスポーツ” に横串を

永島

先ほどスポーツは勝たないといけないと言ったんですけど、僕は2000年に現役引退したんですが、周りからすごく充実して良かったですね、代表にもなってゴールをたくさん決めて良かったですね、と言われました。

でも僕は振り返ってみたら辛抱と我慢の連続だったんです。つまり、本当に苦しいときがあって、いろんなストーリーっていうものがあるにも関わらず、それを知らない方がたくさんいた。



先ほどの新潟の例で言うと、土地柄もあるのか、全てがディスクローズされていて、この選手は実はとても苦労しているっていうのをわかった上で応援しているからこそその熱さがあると思っています。

だから、勝ったときに騒ぐっていうよりも、勝てないときからのしっかりと事実を受入れながら、ストーリーを発信して勝ったときに実はこうだったんだっていうのが必要だと思います。

ここが一番重要なんです。一番共感するところ、ここが人と一緒なんです。

## 震災から30年

沼田

なるほどストーリーね。

それで言うと神戸は街自体が、実はすごいストーリー持っていますよね。それは言うまでもなく震災で、オリックスの日本一の感動というのはまさにそのストーリーの上に立ったものでした。

震災のことはこれからも忘れてはいけないんだけど、それが今後、オリックスが優勝した時のようにスポーツシーンを

盛り上げてくれるストーリーになりうるかという、それはもう望むべくもない。そういう意味では歳月は残酷です。



永島

そうです、違いますね。



沼田

当たり前ですが、会社で社員の顔を見ても震災を知らない人が増えました。神戸市全体を見ても同じことです。そういう時代の中で、また次のストーリーみたいなものをこれから作っていかなくてはダメなのではないかと思っています。



永島

今は1人のアスリートであるその人のストーリーを、個人個人で持っておくべきだと。それが100人100色で、ずっと成功してるやつなんて絶対なくて、失敗したり、苦しいことがあって、やっとっていう乗り越えた人が関わっている。そういった個々のストーリーをやっぱりしっかりと描けるように作っておかないといけない、と思います。

3割打ったとかホームラン打ったとか、そういうことだけでなく、本当のストーリーを知ったら、更に熱をもったファン層が生まれるんじゃないでしょうか。

## 神戸人はおしゃれに・・・

沼田

今のお話を聞いて、一番最初に伺ったイニエスタのこと、彼はそういうドラマ、ストーリーを持っていたということではないのか、それを神戸市民も無意識の内に理解していて、あのセレモニーの感動に繋がったんだと、頭の中で話が繋がりました。きっとINACや女子サッカーの日本代表にも色々なストーリーがあるわけです。

永島

そう、まずは勝つ。そして勝った時に出す。ということです。神戸人ですから、オシャレに出すということですね。僕はそう思います。

## 神戸レディースフットボールセンターアドバイザーとして

沼田

さて、今日はここレディースフットボールセンターでオーバー40女子リーグの観戦や選手の皆さんとの意見交換、そしてこの対談でしたが、一日どうでしたか。

## 永島

皆さん、この炎天下でも明るく元気でした。生の声をたくさん聞けましたし、このレ



ディースフットボールセンターの存在は社会的意義が大きいとあらためて思いました。そういう意味では、もっともっとアドバイザーという立場でありながら、施設と利用者の上に立ち、関係者だけの話じゃないみんなそれぞれの意見を神戸のサッカーとか女子のサッカー、神戸のスポーツっていうところにも還元できることがすごく嬉しいと感じています。これからもすごくいい時間を過ごせたらと思っています。

## 沼田

ありがとうございます。ぜひよろしくをお願いします。

実はこういう機会ですからお話しすると、私自身は長いスポーツ記者としてのキャリアの中でサッカーの原稿はほとんど書いたことないんです。選り好みをしたわけではなくたまたま機会がなかった。ただサッカーの試合というのは、活字のメディアにはものすごく難しい素材なんだということは肌で感じていました。

たとえば野球と比べると、野球というのは間合いのスポーツだと思うんです。ピッチャーが投げる1球ごとの間合いに始まり、ゲームのいたるところに長短の間合いが存在します。その間合いを使って選手や監督は色々なことを考える。それを伝える側も同様にその間合いを利用してドラマを構築していくんです。

それを経て原稿が書き上がっていくんですけど、そういう点で伝え手にとって一番難しいのはサッカーではないかと思うんです。

ラグビーはラグビーで結構間合いがあるんですよね。目まぐるしく見えるバスケットでも何十回という得点のシーンの度にやっぱり間が生まれます。

そういった意味では、サッカーは本当に間がなくて、ずっと動いていて、原稿を構成するのに必要な間合いというものがないなあ、0対0の試合だったら何を書けばいいのかなあ、といつも心配していました(笑)。

## 永島

確かに着眼点が異なるので、他のスポーツとは全然違う



話ですね。そういう意味では、サッカーは世界での競技人口がトップクラスですから、そこにヒントがあったり、ストーリーがあるのかも知れませんね。

沼田

なるほど。ありがとうございます。では、この続きはまた是非次回にお願いします。

永島

こちらこそよろしくお願いします。本日はありがとうございました。

《2023年7月16日：神戸レディースフットボールセンターにて》

\*\*\* \*\*

#### 【対談者プロフィール】

### 永島 昭浩

元サッカー日本代表・ヴィッセル神戸 FW  
スポーツキャスター  
(公財)日本サッカー協会公認 S級コーチ  
(公財)日本サッカー協会 日本代表 OB・OG 会幹事長  
(公財)神戸市スポーツ協会  
神戸レディースフットボールセンターアドバイザー



#### 【プロフィール】

1964年4月生まれ 神戸市出身  
1983年 松下電器産業(現ガンバ大阪)に入団。  
1993年 ガンバ大阪 FWとして日本人初のハットトリックを達成。  
1994年 清水エスパルスに移籍。同年オールスターで MVP 賞。  
1995年1月17日、阪神・淡路大震災で実家が全壊し、「街を勇気づけたい」とシーズン途中から JFL のヴィッセル神戸へ移籍。翌年 JFL2 位で Jリーグ入りを決める。  
1997年現役最年長ストライカーとして全試合に出場し、日本人最多の 22 点を挙げ、フェアプレー個人賞を獲得。  
2000年に現役引退。

- ◆J1リーグ通算 165 試合出場 61 得点
- ◆日本代表歴:国際 A マッチ通算 4 試合出場

引退後は JFA アンバサダーとしてサッカーの普及活動に尽力するなど、サッカースクール等で後進の指導に携わる。

2023 年 4 月から神戸レディースフットボールセンターアドバイザー



## 沼田 伸彦

(公財)神戸市スポーツ協会副会長

前(株)サンテレビジョン代表取締役社長  
元(株)デイリースポーツ代表取締役社長

### 【プロフィール】

1956年3月生まれ 岡山県出身

1979年4月 (株)デイリースポーツ社(神戸新聞社)入社

2009年2月 (株)デイリースポーツ社取締役

2010年2月 (株)神戸新聞社取締役

2012年12月 (株)デイリースポーツ代表取締役社長

2016年6月 (株)サンテレビジョン代表取締役社長

2023年6月 (公財)神戸市スポーツ協会副会長

